
令和3年度 第1回午前

桐蔭学園 中等教育学校 学力検査問題

国 語

令和3年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^かどうしの貸し借り^かもできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は18ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

一 次の――線部のカタカナを漢字になおし、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- ① シセイを正しくすると気が引きしまる。
- ② 運動会の縦割^{たて}りリレーのホケツに選ばれた。
- ③ 算数の授業でスイチヨクに線を引く方法を習った。
- ④ 水槽^{すいそう}の中のイワシのタイグンは見ごたえがある。
- ⑤ ヒリヨウをやりすぎても、花は育たない。
- ⑥ 世界一高いビルをケンチクするのが夢だ。
- ⑦ 円の面積からハンケイを求める。
- ⑧ 有名な楽団の合奏を家族で聞きにいった。
- ⑨ 田舎^{いなか}に住むおばあさんは蚕^{かい}を飼っていた。
- ⑩ 車の舞^まい上げた土ぼこりを浴びた。

二 次の文章（人生相談の質問●とそれに対する答え）を読み、後の問いに答えなさい。

●大まかな意味で大人と子供の区別は何だと思われませんか。

何でしょうね。すぐにはわからない。ちよっと考えてみます。

子供というのは家の中にいるのですが、そこでは※ひご庇護されていますね。その家の外には、社会というものがあり、その子が、家から出て、社会にメンバーとして受け入れられることを、大人になる、と言ったのだと想像はつきます。でも、人が最初、子供として生まれ育って大人になっていく、そういう①「土管の中から青空を見る」——内在的な仕方、——この問題を見てみましょう。

近代以前の世界では、ある日、子供が大人に変わります。それは、右に見るように、子供は家に属し、庇護される者で、大人は、いわば社会のメンバーだったため、ある日、子供はメンバーとして社会に受け入れられることで、大人になった、からです。たとえば、江戸時代の武士の世界では、十四歳さいくらいになると元服といって、子供から大人に変わる。そのとき、名前まで変わりました。幼名というのがあって、子供としての名前ですが、それを捨てて、大人としての名前をもらい、それを名乗るわけです。

でも、近代になると、②これがそんなに簡単ではなくなる。子供から大人になるまでの間に、国境を越えるのではなく、非武装地帯のようなところを通過する。青年期という※モラトリアムの期間ができるようになります。それには、近代が、社会が個人に所定の役割を与えて、大人として受け入れるという前近代のシステムに変えて、個人が自分で道を切り開いて社会のメンバーになっていくという新しいシステムをとるようになったことが大きく影響えいきやうしているでしょう。個人が社会に出て、自分で道を切り開くのですが、その近代社会は個人に一定水準の技能修得のための素養を求めるようになる。読み書き計算などですね。そのため、子供は、社会に出て大人になるまでに、大人になるための——社会のメンバーになるための——最低水準の素養を身につける教育の期間を過ぎさなければなりません。これが、いわゆる義務教育の期間を根幹とする教育の期間で、

子供と大人の間の青年期というモラトリアム期間が生じるようになりました。

でも、そこで人は、大人になるとは、どういうことだろう、と考えざるを得ない。というのも、近代では、もう社会が規定の資格条件をもって大人とは何かをそれぞれの新大人に教えてくれるものではなくなくなってきているからです。親の世話にならない自立している、それが、大人ということ、といえはその通りだが、では、自立していれば誰でも大人かといえ、親からは自立していても、結婚相手に依存していたり、別の存在に依存していたり、他人の自由を無自覚に侵害していたりするケースもないわけではない。質問は、たまかな意味で、大人と子供の区別は何か、というので、自立、と言ってもよいのですが、これだと、どうも、まだ外在的な定義づけだ、という気がします。

そこで、以下、違った話をしましょう。

僕は、大人と子供、というと、アメリカの『**A**子鹿物語』を思い出します。開拓者の家の子供が、子鹿と出会う。可愛がる。友達になる。しかし、子鹿が大人の鹿になって戻ってきて家の畑を荒らすようになる。その子は、泣きながら、その大人の鹿を銃で撃つのです。アメリカにおける、大人になるとはどういうことか、が、端的に描かれています。

それはまた、僕自身の経験ともつながります。僕は一度、大学の文章を書かせる授業で、「私が子供でなくなったとき」「私が大人になったと感じたとき」という課題のもとに、学生に文章を書かせたことがあります。僕自身が、強烈にそういうことを中学生くらいのときに感じたことがあったからです。誰にもそういう瞬間があるだろう、そう思い、自分の中のそういう瞬間を取り出し、それについて書いてもらおうと思いました。でも、いまの若い人は、二十歳くらいでも、そういう瞬間をもっていないようなのです。結果はそれほどはかばかしくなく、^③教師の独り相撲に終わった感がありました（笑）。

さて、**B**僕の経験というものは、こうです。僕はだいたい、五歳くらいのときから家で猫を飼ってきています。最初が、雌の猫でした。昔のことで、また地方都市での生活ということもあったのでしょうか、避妊手術ということは考えなかった。ですから、この飼う猫がよく仔を生むのです。それで、もらってくれる人を探す。運良くそういう人が見つかったり、見つからなかったりする。そして、見つからない場合、仔猫は、捨てられるのですが、子供の僕は、そのたびに、胸をかきむしられるようで、親にもう少し、捨てないでいて、などと頼んだものでした。そして、親を恨んだものでした。でも、中学生になったある日、僕がとうとうその仔猫を捨てに行かなければならなくなった。仔猫を数匹、段ボール箱に入れて、自転車の荷台に段

ボール箱をくくり、歩いて、自転車を引き、河原のあるところまで、捨てに行きました。そのとき、ああ、もう自分は子供ではない、と思っただけです。

でも、いまはそれと違った感想が浮かびます。 ※樋口一葉に明治初期の時代の「子供から大人になる」時期の忘れられない物語があつて、その題は「たけくらべ」です。一人一人の子供が、ずんずんと大人になっていく。でも、その速度が一人一人、違うところから、生まれた物語。というか、その違いに着目したところから生まれた物語です。子供が大人になる、そこで、その速度は、とても重要な役割を果たしているのですね。僕は、一度、同じくその速度に着目して、なぜマンガ『タツ子』の浅倉南が、双子の少年、和也と達也のうち、達也のほうを選ぶのか、という文章を書いたことがあります(『ゆるやかな速度』)。それは、その文を読んでもらうこととして、話を戻すと、『子鹿物語』の場合でも、僕の場合でも、いま僕は、相手が動物だということに意味があるだろうと思っているのです。僕は、その後も猫を飼い続け、いまも、一匹、背後に眠っています。もつとも親しんだ猫は、数年前、死にました。そのショックをいまに引きずっています。そのとき考えたことは、猫は、赤ん坊で自分のところにくる。そして、十数年一緒に過ごし、年老いて、死んでいく。だとすれば、どこかで、自分は、「追い抜かれた」んだ、そのとき、猫もそのことに気づかなかつたし、僕もそのことを知らなかつた。でもどこかで、「追い抜かれた」。赤ん坊として、来て、僕を「追い抜き」、一人の年老いた猫として、老衰し、病を得て、死んでいく。そして何かを考えさせる、そんなことを思いました。

⑤ ですが、だとすると、大人と子供というのは、そう固定化したものではないのではないのでしょうか。僕と猫の関係でいえば、かつては、僕が大人で猫が赤ん坊、子供。それがいつのまにか、僕が子供で、猫が大人になり、老人になっている。僕が子供から大人になるというより、大人の僕の中に子供の僕がいて、子供の僕の中に大人の僕がいるのです。成人式というのは、自分の中の子供を、扼殺する儀式でしょう。また、あ、自分は大人なのだ、というのは、自分の中の子供が死ぬ、というときの感慨でしょう。でも、そういう経験をへながらも、自分の中には、大人がずいぶんと昔からいたように、いまもおり、子供が、ずいぶんと昔からいたように、いまもいる。僕はいま、そう、考えています。そのうえで、おおまかな意味で、そういう僕にとって大人と子供の区別は何か、というのなら、今日、僕にはこんな気がしています。大人とは、人の誤解にさらされても、自分のなすべきことをなし、いべきことをいう人、子供とは、そのことから生じる悲しみのようなものを、いつまで

も忘れない人、その両方を手放さない人が、^⑥一人のよき個人でしょう。

(加藤典洋『考える人生相談』より)

注

※庇護^{ひし}|| かばって守ること。

※モラトリアム^{ひぐちいぢよう}|| 義務や責任を先送りすること。

※樋口一葉^{ひぐちいぢよう}|| 日本の女性小説家。一八七二年〜一八九六年。

※扼殺^{やくさつ}|| 道具を用いず、自らの手で首をしめて殺すこと。

※感慨^{かんがい}|| 心で深く感じること。

問1 ——線部①『土管の中から青空を見る』——内在的な仕方」とありますが、これはどのような「仕方」ですか。その

説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 空き地に置かれた工事用の土管の中で遊んでいたような子供が、せまい世界から広い大人の世界に出ていこうとする過程を、子供の内面からとらえようとするような仕方。

イ 空き地に置かれた工事用の土管の中で遊んでいたような子供に、外の広い世界を見せ、大人になることを社会全体で支えようとするような仕方。

ウ 空き地に置かれた工事用の土管の中で遊んでいたような子供に、外にもっと広い遊び場があることを気づかせ、そこに参加するよう、うながそうとするような仕方。

エ 空き地に置かれた工事用の土管の中で遊んでいたような子供が、外の世界に対するおそれを乗り越え、大人としての一步を踏み出せるよう、子供の気持ちをあげまそうとするような仕方。

問2 —線部②「これがそんなに簡単ではなくなる」とありますが、なぜ「簡単では」なくなったのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会が個人を大人として受け入れる条件が厳しくなり、多様な素養を身につけなければならなくなったから。
- イ どのような大人になるか個人の判断でゆっくりと選択する時間が失われてしまったから。
- ウ 大人になるための教育を受ける機会が失われてしまい、自分の道を独力で切り開いていかなければならぬから。
- エ 大人になる前に、社会のメンバーになるための一定水準の素養を身につける期間が必要になったから。

問3 ……線部A『子鹿物語』……線部B「僕の経験」、この二つの例を通して筆者が言いたいことは何ですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 命を奪う行為の罪深さを実感すると同時に、動物を今までのように愛することはできないと感じるということ。
- イ 愛するものを傷つけることが大人になるためには必要な儀式であることを、身をもって理解するということ。
- ウ 社会や家庭における役割を果たすと同時に、今までの自分から別の自分になる瞬間を痛感させられるということ。
- エ 自分が罪を背負うことが、大人という存在になる上で誰にも必要な過程であると知るということ。

問4 —線部③「教師の独り相撲に終わった」とありますが、ここではどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学生の作文に価値を見いだすことができず、教師としてどうすればよいか分からないまま終わったということ。
- イ 学生の作文がいまひとつであったが、教師ひとりだけ熱心にするまい、試みが空振り（からぶ）りに終わったということ。
- ウ 学生の作文が期待外れであり、自分の想い出にひたつたまま終わったということ。
- エ 学生の作文がどれも手ぬきであることにあきれかえり、教師が学生を一方的にしかって終わったということ。

問5 ……線部C「たけくらべ」……線部D『タッチ』、このふたつの作品を、筆者はどのようにとらえていますか。次の（ ）に当てはまる形で二十字以内で答えなさい。ただし、句読点などの記号も字数に含めます。

（ ） ということに着目した物語。

問6 ——線部④「相手が動物だということに意味があるだろう」とありますが、なぜそういえるのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 猫と人間の生きる時間は同じ長さではないが、お互いそういうことを意識しないし、どちらの方が長生きするかを知らなくてもできないものだから。

イ 猫の方が人間よりも先に大人になり、老いて死んでいくことは避けられないことであり、その悲しみを埋めるため、人は猫を何匹も飼うものだから。

ウ 猫と人間は生きる速度が異なるが、ともにそのことに気づかないまま、猫は人間の年齢に追いつき、そのまま追いついて人間より先に死んでしまうものだから。

エ 猫の生きる時間は人間より早く、猫の方が大人として生きる時間が長いが、それでも人間にとって猫が可愛らしいという点は変わらないものだから。

問7 ——線部⑤「大人と子供というのは、そう固定化したものではないのではないのでしょうか」とありますが、筆者「僕」は「大人」と「子供」のあり方をどのようにとらえていますか。次の（ ）にあてはまるよう本文中から三十字以内でぬき出して答えなさい。ただし、句読点などの記号も字数に含めます。

（ ） というようなあり方。

問8 —線部⑥「一人のよき個人」とありますが、その内容の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人に誤解されるようなことがあっても、自分の役割をきちんと果たしたり、伝えたりすると同時に、その役割にまつわる切なさなどの感情をずっと心の中に留めておくような人物。

イ 社会から与えられた所定の役割を受けいれると同時に、そのことで人に誤解されることから生じる悲しみをいつまでも忘れないような人物。

ウ 人を敵にまわすようなことがあっても、自分の信じる道を切り開いていくと同時に、そのことによって生じる心の傷を乗り越え、少しずつ成長し続けるような人物。

エ 人に反発されるようなことがあっても、社会の中で、自分の役割をつとめ、言うべきことをいうと同時に、他者がどのような気持ちになるか、どういう悲しみを感じるかという気づかひも忘れないような人物。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「さきこ（わたし）は姉の笹子（笹ちゃん）とふたりで手作りサンドイッチ専門店を営んでいる。笹子はお客さんの気持ちに寄り添った素材や味でサンドイッチを作る。今回のお客さんは三戸真哉である。三戸の中学時代の同級生、水野知花は、三戸の「新井さんのお日さまキュウリ」がおいしい」ということばをきっかけにキュウリが好きになる。中学校を卒業して半年後、高校一年の夏に二人は再会する。そのとき水野が「新井さんのお日さまキュウリ」を持参したが、三戸は「それはにせものだ。キュウリなんか、おいしくない」と言い放つ。そのことばにショックを受けた水野はその場を立ち去る。その際、水野は「キューカンバーサンドイッチ注文つきの花火パーティーのチラシ」を落としてしまう。水野が去ったあと、三戸はそれを拾った。なお、キューカンバーサンドイッチとは、キュウリをはさんだサンドイッチのことである。」

花火パーティーの日、^① わたしたちは店を閉めたあと、キューカンバーサンドイッチをつくりはじめた。

※ 『かわばたパン』でいろいろ試食させてもらったのは、このためのパンを選びたかったかららしく、笹ちゃんは、きめ細かでほんのり甘い食パンを選んだ。薄く切ってもきちんと弾力があるし、香りもいい。おとなしいキュウリをほどよくアシストしてくれるパンだ。

「ねえ笹ちゃん、来るかな」

わたしは、薄切りしたパンにしっかりとバターを塗っていく。ふだんのサンドイッチより多めのバターだ。

「来るよ。来てほしいなあ」

笹ちゃんは、キュウリを理想的な厚さにスライスする。キッチンのドアの外で、コゲがニャアと鳴く。キュウリに気づいているのだろうか。

「笹ちゃん、店の外に誰かいるのかも」

そういう笹ちゃんは、コゲの鳴き方を聞き分ける。わたしにはまだまだ難しい。キッチンを出て、閉店後は内側にカーテンをおろしてあるドアのほうへ歩み寄る。ガラスの向こうに人影があるのは、カー

テン越しにぼんやりとわかる。きつと彼だ。期待しながらわたしはドアを開ける。

いきなり店の中から人がでてきて、たじろいだ少年は数歩後ずさった。目がぼちりしていて人なつっこい印象で、細い体にグリーンの縦縞シャツはなんとなくキュウリっぽい。なんて思ったのは先入観だろうか。

「いらっしやいませ」

「あの……、ここもう閉まってるんですよね？」

わたしは、彼が手にしている花火パーティーのチラシに目をとめる。あれはサンドイッチ注文券だ。

「注文券、お持ちですか？ でしたらどうぞ」

「え、あの、でもこれは拾ったんで……」

「大丈夫ですよ」

^Bおすおすと、彼は店内に入ってきた。イトイン用の椅子を勧め、わたしは券を受け取った。

「この券、水野知花さんの落とし物ですよ。キューカンバーサンドイッチ、彼女が好きな『新井さんのお日さまキュウリ』でつくってるんです」

「でも……、そのキュウリはもうないんです。今のは、同じ名前でも別物やから」

「今のは食べたことがあるんですか？」

聞くと、彼は首を横に振る。

「じゃあ、違いがあるかどうかわからないんじゃないでしょうか」

「違ったら？ 丸かじりって、本当にキュウリの味がはっきりわかるんで、食べて違うって思うかもしれないのがイヤなんです。苦みを感じるかもしれないから……、ちょっとでも苦かったら、ぜったいむかつくから」

何に、誰に対してむかつくのだろう。新しいつくり手の青年？ それとも、引退したおじいさん？ それとも……。

「キューカンバーサンドイッチ、食べたことありますか？」

笹ちゃんがキツチンから出てきて言う。彼はまた首を横に振る。

「ぜひ試食してみてください。あなたがよく知っている『新井さんのお日さまキュウリ』とは違うかもしれませんが、食べた

ことのないサンドイッチなら、今まで一番だったキュウリと違っていても当然でしょう？」

できあがったばかりのキューカンバーサンドイッチがお皿に並んでいる。それを笹ちゃんはテーブルに置いた。

彼のおじいさんがつくるキュウリはもうない。でも、同じ名前のキュウリはある。三戸君は、それを丸かじりして違うところを見つけてしまうのがイヤだという。

でも、ここにあるのはキュウリじゃなくて、キューカンバーサンドイッチだ。そのままのキュウリを味わえるけれど、そのままのキュウリじゃない。

「具はキュウリだけですか？」

彼にとっては意外だったようだ。サンドイッチのキュウリは、たいてい彩りや添え物で、メインの具材にするイメージではないかもしれない。

「ええ、キュウリを楽しむサンドイッチですから」

「それに小さくないですか？」

「つまんでひとくち、っていうサイズです」

あまりにもシンプルで、これだったらまるごとのほうがしっかきキュウリを味わえて食べ応えがあるに違いない、と、いぶかしんでいるのか、彼は斜めから横からサンドイッチを観察した。

「注文券なんてつくったのは、水野さんに食べてほしいと思ったからなんです。彼女にキュウリを嫌いになってほしくないから。そう思いませんか？」

その言葉に背中を押されたのか、^④三戸君は思い切ったように口に運んだ。

「おいしい……」

そうして、驚いたようにつぶやく。

「それに、こんな食感とか味も、はじめてです」

笹ちゃんがつくったものだけど、わたしは誇らしくなって頷いた。

キュウリのほどよい厚さは、硬すぎずやわらかすぎず、パンのソフトな感触にちょうどよく皮の削ぎ具合を調節

している。

ふだんより多めに塗ったバターの香りと塩気がキュウリを引き立て、ソフトなパンとパリパリしたキュウリが調和する。ふたつめに手をのばし、不思議そうに彼はキュウリの断面を眺めた。

「キュウリって、きれいな色ですね」

パンに、薄切りしたキュウリを少しずつ重ねて並べていくと、緑の断面が幾何学的な模様みたいに出てくる。ふだんのキュウリとは違う、おめかししたキュウリだ。笹ちゃんのサンドイッチは、見慣れた食べ物がよく行きの顔になる。新たな魅力を、パンにはさむだけで引き出してしまおう。三戸君も、^⑤そんな魔法を感じたのだろう。

「おれ、水野にあやまりたいんです。八つ当たりみたいなことしてしまっただけで、あいつは悪くないのに……。ぜったいに、キュウリを嫌いになつてほしくない。これ水野に食べてもらいたいんです」

「新井さんのキュウリ、今年のはやっぱり丸かじりしたくないですか？」

その質問には、悩んだようにうつむく。

「新井って、おれの祖父です。でも今年から、別の人がつくってます。おれ、小さいころからキュウリが好きで、夏休みにはいつも収穫を手伝いに行つて、大人になつたらじいちゃんといっしょにつくるってよく言つてました。そういうじいちゃん、跡継ぎができたつてよろこんでくれてたんですよ。でも中学で進路のこと考えて、高校の見学に行つたとき、パソコンのプログラムつくつてる授業があつて。興味があつたし、在校生の話とか聞いてたら、勉強したいなつて思えて」

「それはステキなことじゃないですか」

夢ができたのだから、おじいさんだつて応援したいと思つているだろう。

「農業を継ぐなんて言つても子供のことだから、誰も本気にしてないのはわかってました。だからじいちゃんは、地元の農協と協力して、若い人に土地を貸したり、積極的に手伝つてもらつたりしてたし、おれもすんなり進路を決めたけれど……。足を悪くして引退するつて聞いたとき、ショックだったんです。これからもずっと、じいちゃんのキュウリを食べられるつて思つてたから」

味が変わったとか、作り手が違えばにせものだとか、そんなことは彼にとつて、本当はどうでもいいことなのだと感じなが

ら、わたしも笹ちゃんも、黙だまって話を聞いていた。

「じいちゃんを裏切ったみたいなのがしたんです。何十年も変わらずにつくってきたキュウリを、おれよりもっと理解してる人がいて、ちゃんと残そうとがんばってる。なのにおれはじいちゃんから離はなれてく。もうキュウリ食べる資格ないねんなんて思えて」

三戸君にとって「新井さんのお日さまキュウリ」は、自分と祖父の間にもある、とくべつな絆きずなだったのだろう。けれどもう「新井さんのお日さまキュウリ」は次の世代に引き継がれた。

おいしいキュウリをこれからも食べてほしいと願う、おじいさんの三戸君への思いは変わらないけれど、キュウリは※あの金髪青年の生き甲斐がひにもなっていく。三戸君の中には、淋さびしさと自責の思いとが混じり合っていて、新しい新井さんのキュウリに苦みを感じてしまいそうだったのだ。

「おいしいと思うなら、食べていいんじゃないかしら。食べたいものを食べるのに、資格なんていらないます。おいしいと思えたら、それ以上の理解なんて必要ないでしょう？」

⑦ 笹ちゃんはおっとりした口調で、はっきりした答えを出す。姉妹とはいえ、わたしにとって笹ちゃんは不思議な存在だ。どこもかしこもやわらかそうな笹ちゃんは、堅かたい芯しんをどのへんに隠かくしているのだろう。

「これ、水野さんに届けてくれませんか？ 水野さんの友達がここへ来たとき言っていました。今日の花火パーティ、いっしょに行くんだった」

小学校の校庭に夜七時集合、花火とおやつは各自持ち寄り。キューカンバーサンドイッチは、きつとおやつにちょうどいい。「あなたが届けたキュウリを、水野さんに食べてほしいんです」

三戸君は、もうひとつキューカンバーサンドイッチを手取る。それはロールサンドにしたキュウリだ。ひとくちサイズの輪切りになっている。

「ちっちゃな花火みたいや」

キュウリの丸い断面をじっと見て、三戸君は言った。

(谷たに 瑞恵みずえ『語らいサンドイッチ』より)

注

※かわばた。パン^{さんぱん}と笹子^{ささこ}と。パンを仕入れているパン屋。

※あの金髪青年^{きんぱつ}。三戸君の祖父のキウウリづくりの跡^{あと}を継^ついだ若者。髪^{かみ}の毛^けを金髪^{きんぱつ}に染めている。

問1 ……線部A「たじろいだ」……線部B「おずおずと」……線部C「いぶかしんでいる」の本文中での意味として最も

適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「たじろいだ」

ア がっかりした

イ 緊張^{きんちよう}した

ウ 怒^{いか}りにふるえた

エ ひるんだ

B 「おずおずと」

ア 隠^{かく}れるように

イ 照^あれながら

ウ ためらいながら

エ 自信ありそうに

C 「いぶかしんでいる」

ア 面白おもしろそうだと思っている

イ うたがわしく思っている

ウ まずそうだと思っている

エ 意外に思っている

問2 —線部①「わたしたちは店を閉めたあと、キューカンバーサンドイッチをつくりはじめた」とありますが、ここでの

二人の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 遅おくれて来店する客にもサンドイッチを提供できるよう準備しておこうと考えている。

イ 客に出したのとは別に、自分たちが食べたい特別なサンドイッチを食べようと思っている。

ウ 自分たちが待っている人に、ぜひともサンドイッチを提供したいと思っている。

エ 自分たちの仲間向けに特別なサンドイッチを用意し、小さなパーティーをしたいと思っている。

問3 — 線部② 「彼は首を横に振る」・③ 「彼はまた首を横に振る」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ②では、今の「新井さんのお日さまキュウリ」を食べたことがないことを示し、③では、キューカンバーサンドイッチを食べたことがないことを示している。

イ ②は、「新井さんのお日さまキュウリ」が今と昔で味が同じではないことを示し、③では、キューカンバーサンドイッチが好物ではないことを示している。

ウ ②では、今の「新井さんのお日さまキュウリ」を食べる気がないことを示し、③では、キューカンバーサンドイッチを食べる気がないことを示している。

エ ②では、「新井さんのお日さまキュウリ」が昔とは同じ名前でも別物であることを示し、③では、キュウリの苦みが嫌いであることを示している。

問4 — 線部④ 「三戸君は思い切ったように口に運んだ」とありますが、なぜ三戸君はキューカンバーサンドイッチを口に運んだのですか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笹ちゃんと「わたし」が作ったキューカンバーサンドイッチには、水野さんにキュウリを嫌いになって欲しくないと、いう気持ちがかめられていたことを知り、心が動かされたから。

イ 笹ちゃんと「わたし」が作ったキューカンバーサンドイッチには、水野さんと自分においしいサンドイッチを食べさせ、二人を仲よくさせようという目的があったことを知り、それにこたえようと思ったから。

ウ 笹ちゃんと「わたし」のつくったキューカンバーサンドイッチには、キュウリに対する自分の気持ちを前向きにさせようという意図があることを知り、思いなおしたから。

エ 笹ちゃんと「わたし」が作ったキューカンバーサンドイッチには、自分のキュウリについての考えを改めさせる目的があったことを知り、素直になるべきだと感じたから。

問5 ——線部⑤「そんな魔法」とありますが、「魔法」とその「魔法」のここでの効果の説明として最も適切なものを次の

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笹ちゃんは、見慣れた食材であるキュウリをサンドイッチにする中で、キュウリの色や模様とパンを複雑に組み合わせる技術をもっており、キュウリをあたかも高級な食材であるかのように見せることができる。

イ 笹ちゃんは、見慣れた食材であるキュウリをサンドイッチにする中で、キュウリ本来の色や模様の美しさを引き出すことができ、しかも、そこにいるお客さんを楽しい気持ちにすることができ。

ウ 笹ちゃんは、見慣れた食材であるキュウリをサンドイッチにする中で、色や模様を美しく組み合わせて見せ、そこにいるお客さんをうっとりさせ、その本音を、するすると引き出すことができる。

エ 笹ちゃんは、見慣れた食材であるキュウリをサンドイッチにする中で、キュウリの色や模様を美しくおしやれに見せることができ、また、そこにいるお客さんの心を解きほぐすこともできる。

問6 ——線部⑥「淋しさと自責の思い」とありますが、ここでの三戸君の気持ちを五十字以上、七十字以内で説明しなさい。

なお、「祖父」「キュウリづくり」という言葉を用いること。句読点などの記号も字数に含めます。

問7 —線部⑦「笹ちゃんはおっとりした口調で、はっきりした答えを出す」とありますが、ここでの笹ちゃんについての

説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食べたいものを口にすることに資格や作り手は関係なく、そういう小難しいことを考えずに、ただおいしいか、まずいかに集中して判断すべきだということを、静かな口調だが明確に言い切っている。

イ 食べたいものを口にする資格があるかどうかを考える必要はないということ、食べたいものを食べておいしいと感じたらそれで十分であるということを、やわらかい口調だが、しっかりと伝えている。

ウ 食べたいものを口にする資格があるか、誰が作ったかということも気になるだろうが、その時々に出てきたものを何でも感謝して味わうべきであるということを、やさしい口調だが、きっぱりと伝えている。

エ 食べたいものをおいしく食べるためには、自分にそれを食べる資格があるかとか、誰が作ったかとかそういう具体的なことを考えてはいけないということを、落ち着いた口調だが、ずばりと言いつ放っている。

(おわり)

